

第5回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

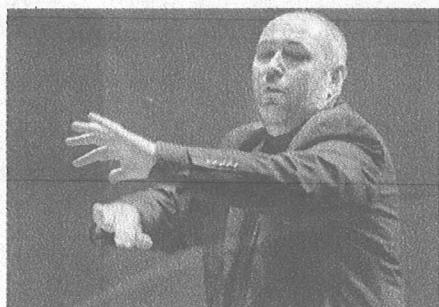
企画2《水上の音楽》《戴冠式アンセム》

演奏会批評 (山崎浩太郎氏)

『日本経済新聞』2008年1月24日(木)夕刊

クラシック

■ ヘンデル・フェスティバル・ジャパン公演



指揮をするオノフリ
=写真 堀田 力丸

第五回ヘンデル・フェスティバル・ジャパンから、エンリコ・オノフリ指揮のキャノンズ・コンサート室内管弦楽団と合唱団を聴く。

オノフリは、先鋭的な演奏で知られるイタリアの古楽団体、イル・ジャルディーノ・アルモニコのコンサート・マスターを長くつとめるヴァイオリニストだが、近年は指揮活動にも意欲を燃やしてきた。指揮ぶりは俊敏な躍動感と活力にみち、日本でも高い人気を獲得している。その彼が日本人の合奏団と合唱団を指揮する演奏会である。

前半の「水上の音楽」は新発見の筆写総譜による演奏。従来は三つの組曲に分かれていた二十二曲をひと続きで演

合奏と合唱、後半に躍動感

奏し、後半は曲順も変わる。しかし演奏は、はじめ楽員側に遠慮が目立つ。オノフリがその激しい身ぶりで要求するうねりや、飛び跳ねるような思い切りのいい動きが、実際の音としては何割か減衰され、慎重で上品な音楽になってしまうのだ。特に弦楽において、全身で音の弾力を表現することに慣れていない日本の演奏家の欠点が出ていたのだが、曲がすすんで硬さもとれると、後半に数を増す管楽奏者の健闘もあって響きに厚みが増し、動きが出てきた。

そして休憩後の合唱を加えた「戴冠式アンセム」では、音楽の印象は温かく、豊かなものとなる。歌心があり、音楽を呼吸させる術に長けているオノフリは、合唱の各声部の輪郭を明快に、大きく描き出す。それにつられるように合奏も躍動し、ヘンデルならではの壮麗で輝かしい響きを味わえる、後味のいい演奏会となった。オノフリのような新世紀欧州の躍動的な演奏様式が、日本にも広まるきっかけになってほしい。18日、浜離宮朝日ホール。

(音楽評論家 山崎 浩太郎)